するのかを見極めるまで、条約締について、中ソがどういう出方を

て、日本は、そうした変化に対応

的外交を進めるよう提言する。できるフリーハンドを持ち、選択

中国を専門とする筆者の分析は

係改善をはかるかもしれないとみ

了する中ソ友好同盟相互援助条約 打ち出されている。 扱うかに護者の考え方が、明確にの一年前、一九七九年春に態度を ている『覇(は)権』問題をどう つまり、一九八〇年に期限の満 **結を符てという。双方は期限満了** 国は、なんらかの形でソ連との関 鄧小平が外交の第一線に立った中 明らかにすることになっている。

90

信に 溺ちてい るとさえ 感じられ合日的問題に取り組みながら、自

■東洋経済新報社。一、二〇〇

図解を入れて解説

ふだん階の体力づくり

の試練」と位置づけている。

「アジアの国際環境」のくだ

「わが国外交にとって戦後最大

体力づくりを解説している。自 ら、日常的に手軽で長続きする 菜や年齢別に好適な種類を図解 上夫してあり実用的だ。とくに し、健康法を選択できるように 分の体力と弱点を自分で判定 健康法は、朝と夕方の違い、 体力づくり ブームの おりか 松田克治菩

ジのツボなど効果的な場所も示 人りで解説している。マッサー 手」とみる。 (東洋経済新報社・一、二〇

にとって「かなり手ごわい相 る相手」となっただけに、 策的・選択的な外交を展開し得 中国が「毛沢東時代と違って政 活など実権派の台頭について、 りでは、鄧小平氏の劇的な再復

日米

されている。筆者は信大農学部 天才のプロフィル

「刀匠汲清壁の生涯」

助教授。

(農山網村文化協会・九●○ 補環) 刀匠源滑騰の生涯」と、これを 作の形をとった「前夜の流星ー が本書である。 ひかれていた。そして盛いたの 方に、同郷の詩人である著者は 生きて去った刀匠・政府暦(山 小諸に生まれ、幕末を激しく 消塵の人間像に迫ろうと、創 が残した作品とその生き 爾野埃人等

「覇権」の背後分析、 「日本外交の選択」

年間に、 国語大教授で、現代中国研究に に執筆した評論のうち、国際関 幅広く活動中。 著者は、松本市出身の東京外 水紙はじめ多くの紙誌 本質は、過去十 中傳發維務

> 70 保 外交に関するものをまとめ

中ソ対立など厳しい国際政治の をめぐる最大の焦点の「覇権」 規実を分析、 問題について、その背後にある まず、日中平和友好条約交渉 「覇権」の扱いは

-1978.04.28 時事解説

『日本外交の選択』

米中ソ世界戦略のはざまで――

中嶋

嶺雄

著

バ ランスのとれた考え方 『日本外交の選択』 『昭和塾』 室賀 定信 著

交戦略に基づく広範な外交戦略

第四に、日中関係の緊密化は、 を検討することを求めている。

アメリカのアジアにおける勢力

均衡の枠組みを崩さない範囲に

中でとらえるパランスのとれた 考え方を提示している。 当面の日中平和友好条約への対 ており、日中関係を国際関係の おいてのみ行なわるべきだとし とうした前提条件に基づいて 戦略的色彩の濃いものだと確認 世界戦略を背景にしたきわめて

論しており、きわめて説得的で い条約を結ぶべきではないと結 条項入りの条約という前例のな されるかぎり、日本は「覇権」

第二章は、主として一九七日

にしばらくの時間をかけること ので、日中条約についての選択 の確固たる見通しが可能である 点に、毛以後への中国について

表示をする七九年四月という時

を主張している。 代表大会で決着をみなかった華 評者も、この三月の全国人民

著者の見解と全く一致する。 するだろうから、日中条約への 示の時点で、中国外交の選択を 四月の中ソ条約に対する意思表 国鋒指導部の内部対立は、明年 まで待つべきだと考えており、 態度決定は、最小限、明年四月 めぐる論争によってピークに達 結局、著者は、条約が中国の

待したい。

第四章のアジアの国際環境は

持ってくるか、今後の論稿に期

とどまらず、一貫して日本の外 するという国際関係論の枠内に 際情勢をリアルに客観的に分析 る日本の対応に当たって必要な 交的選択という視座に立ってい れている。 基本認識がきめこまかく論述さ 以上のように、著者は単に国

表大会等々の中国内政の変化と 党大会、本年前半の全国人民代 後半の鄧小平再復活、第一一回 者の見解がどのような広がりを 年に書かれたものである。昨年 いう新しい条件が加われば、著 としているが、この評論は七六 は、中ソ和解はきわめて困難_

コンセンサスが迫られている現 条約をどうみるか――全国民的 ることがわかる。日中平和友好

成っている。

いる日中平和友好条約交渉にお

外交姿勢の体質から脱して、中 中ソ等距離外交という受動的な

ソに対する「ダイナミック・パ

言上の選択は、問題の本質的な

ている。中ソ対立の今後につい 歴史的、構造的分析に当てられ

在、わがオピニオンリーダー層

ては「毛沢東型の対ソ認識を継

年の日中国交正常化をめぐる日

本の対応、第三章は中ソ対立の

て合意するとか、いくつかの文 上ないしは表現上の妥協によっ を拒否するとか、あるいは文面 三国の「覇権」についてはこれ と後半を切り離し、いわゆる第 応として、「覇権」条項の前段

第一章は、今日本が当面して

ジアの国際環境の四つの章から

の方向を展望することが最低限

能性があり、毛沢東以後の中国

必要なことを挙げる。第二に、

もの。日本外交の選択、日中関

たものを選び、一冊にまとめた 中から国際関係や外交に関連し にわたって執筆してきた評論の

交の選択の前提条件として、第

に中ソ対立の将来に変化の可

権」条項の危険性を指摘する。 来を分析することによって「覇

そして、条約に対する日本外

との本は、著者が過去一〇年

係の視座、中ソ冷戦の時代、ア

宜にかなっている。著者は、中 を取り扱っており、きわめて時 ける日本外交の選択という問題

ソ対立の現局面と「覇権」の由

識を高め、迂回的かつ柔軟な外 第三に、ソ連の脅威に対する認 ランス」外交への転換を説く。

友好同盟援助条約に中ソが意思 八〇年四月で期限の切れる中ソ 解決につながらないこと、一九

後継指導体制を引き継ぐ場合に 承するリーダーが中国共産党の

解を深めることができよう。 (東洋経済新報社 一二〇〇円 は、著者の問題提起によって理 柴田 53. 5. 13

サンケイ新聞論説委員

とアジア政策などアジアにお 対応のあり方、中国の世界戦略 づけ、アジアの平和への日本の ジアにおける中国の脅威を位置 アメリカのベトナム撤退後のア 選択」という表現の意味は、米、 たものである。かなり以前に書か や外交に関連したものを選び、巧 ある。著者が過去十年間にわたっ して古さを感じさせない。 れたものも含まれているが、けっ みに接合させて一冊の本にまとめ て合いた評論の中から、国際関係 言を続けている中嶋氏の最近著で この本のタイトル「日本外交の 精力的にアジア問題について発 日中平和友好条約の問題で日本が 明かしたのがこの本である。いま なそうとしていることを著者はひ

びしい整告を発している。

と中国問題に関する記述には迫力

外交の内在的把握なり、ソ連外交 したがって、この本が、アメリカ

の底深い分別なりによって減わ

を、、対中軟弱外交、と捉え、き 切られる著者だけに、中ソ対立な

のバランスの中で、日本はいま選 ソ、中の三大国がつくりなす勢力 とつの重大な選択の岐路と捉え、 「覇権」問題の重要性を執拗(しを与えられている。熱っぽい文章中国像の検証の結果得られたある "覇権"の重要性説く 中嶋 と念入りな実証によって濃い密度
この本の強さは、やはり、現代
たとき、日本のアシア政策の与性 文章のひとつひとつが深い読みがあり、説得力がある。 嶺雄著

国な外突の題駅

好書である。 場を知りたい人に、広く勧めたい る説者は少なくないことだろう。 いまのアジアで日本が置かれた立

と示唆に接することに再びを感ず

アジア観に含まれる得がたい消費

なにはともあれ、著者の柔軟な

るだろう。

はひと通り整うことになるといえ

つよう)に説いている。「ソ連に のスタイルはまさにいつもの中嶋 種の「中国像」を前提として、日

(東洋経済新報社·一二〇〇円)

たいする警戒のあまり、条件反射氏特有のものである。とくに、現

り、その軍大な岐路においてどれ だけのことを配慮すべきかを説き

的に中国への接近を示す」態度

代中国についての権威ある発言でんと分別しているところにある。

本外交なリアシア情勢なりをきち

京大東南アジア研究センター教

矢野

択の
岐路にあるという
意味であ



者に与えるのは、著書の着眼と分

ることの危険を力脱している。こ

『日本外交の選択』

米中ソ世界戦略 のはざまで

中国のペースで平和条約を締結す 意味やその性格を詳細に説明し した観があるが、著者は「脳権」の 否同論は新聞紙面その他で出つく 題だ。すでにこの問題に関する簡 大問題は、日中平和条約の締結問

の論文がいまなお新鮮な印象を説

析が優れているからにほかならな

(3)

著者が絶えず念頭に置いているの 門家の域を脱している。しかも、 のであって、単なる中国問題の専 て国際問題を展望、分析している ように、教授は戦略的視点に立っ

ただただ先方の条件で締結せよと

ないまま "脳権" 条項入りの平和

友好条約という "危険な条約"を

のは見事と言うほかない

外交評論家·田久保忠衛)

ティックな外交評論になっている えに、いい意味でのジャーナリス いち密な裏付けが行われているう

交的交渉能力が要請されよう。だ

これらの詰めがほとんどされ

昭和53年6月25日発行

係、米中関係、 りであるが、

インドシナ半島とのかかわり合い

題の権威であることは周知のとお

中国を中心に中ソ 中国と朝鮮半島、

東洋経済新報社刊

中馬福雄者

に数いはないことになる」という 識が通用するようでは、日本外交 友好条約のメドを"などという論 が、「 ″参院選 までに日中 平和 しか思えないものが いるようだ び付けるかばかりを考えていると 自分の利益に日中条約をいかに結 っちのけで、当面自民党もしくは 政府の責任者の中には、国益はそ 頂門の一針ではなかろうか。日本 指摘は、日本政府にとってまさに 義。というものであろう」という もなければ、中国語でいう。売国主 いうのは、まさに暴論であり、さ

着者の発言をかみしめてほしい。 日中関係を主要テーマにした第

[1](OCE)

一章、第二章のほかに、第三章で

中胞教授が日本における中国問

に論じられている。「米中ソ世界戦 などが、大きな視野に立って縦横

力を持っているように思われる。 の本の中でもこのくだりは最も坦

「これらの詰めには、高度の外

じられている。いずれも学者らし さらに第四章ではアジア全体が論 は中ソ対立問題が取り上げられ、

略のはざまで」という副題が示す

が短い。にもかかわらず、十年前 に関する評論は一般的に言って息 とめたものである。時事的な問題

諸論文を一冊にま での間に書かれた

領雄教授が一九六 九年から七七年ま

のあり方である。

当面、日本外交が直面している

この書物は中嶋

は、日本の国益であり、日本外交

む諸々の囚果関係を明快に解明した好者である。 係の大きな流れを歴史的にとらえ、そのなかに潜 中日間の戦略的連携のわく組みが出来上がるから 中提携が成立し「太平洋横断連携」ともいらべき米 要な方向付けを与える。 そのなかにおける日本外交の位置付けを明らかに んで妥結したとすれば、 再開される日中平和友好条約交渉が仮に順 著者は、過去十年間のアジアの激動を振り返り 本書は、こうしたアジアを舞台とする国際関 日米同盟を基盤とする日 日本の進路にかなり重 調 K

覇を称えず」のスローガンによって、対ソ戦略を じ、対ソ臨戦体制の強化を軸に、中国の内政・外 事介入、翌六九年の珍宝島ならびに新疆ウイグル アジアの現況をみるさい、 の対ソ姿勢が、一九六八年のソ連のチェコ軍 その根底にあるのは 対ソ憎悪へと転 いわ

中国 中ソ対立であることはいうまでもない。本書は、 固めた中国の現実を生々と伝えている。 ゆる「深く地下道を掘り、広く食糧をたくわえ、 交が組み立てられた経緯を詳細に説明する。 地区での中ソ軍事衝突を契機に、

●埋もれた良書を掘り起こす (14)

中 日本外交の指針を明快に説 嶋嶺雄著「日本外交の選択」

治力学にしたがっての理性的かつ柔軟な外交戦略 確立が急務だと説いている。 いわれる日本外交の欠点を鋭く指摘し、 7 いる。いわゆる場当たり的ないし心情主義的 国際政

書名は 史的大転換の過程をダイナミックに追っている。 には、中国 あらしを乗り越え、中ソ対立の激化、 は中国である。 著者は中国専門家として商名なだけに分析 「日本外交の選択」 四つの近代化の推進へと動く中国の歴 激動 中共革命の勝利から文化大革命 の十年ともみることができる。 であるが、内容的 米中和解 の中

ジア諸国も巻き込もうとするのがソ連の対アジア 約である点を指摘し、 は、 結んだことを挙げ、 ドと七 想を打ち出したのち、 ジネフ・ドクトリンにもとづくアジア集団安保構 権条項だとみる。そしてソ連が、六九年六月のプレ いを持った条約というのであり、 のアジア集団安全保障構想に対抗する戦略的ねら 著者の日中平和友好条約に対する観点は、 軍 事 一年にはイラクとそれぞれ平和友好条約を 政治的諸問題を協議する準軍事同盟条 これらがいずれも、 七一年エジプトおよびイン この条約網に日本などの その眼目が反靭 緊急時 ソ K 連

> 好条約だというとらえ方をする。 略 であり、 これと対決する突破口が日中平和

友

述べつつも、 盟条約の存廃が明らかとなる一九七 れる点は手厳しく批判する。 けないと警告する。日中は異母兄弟であり、 悠の裏返しとして日中友好ムードに流されてはい 日中条約の締結を待っても遅くないと提案する。 ソ漁業交渉のさいに示された日本国民の対ソ不信 種の深い親近感で結ばれていることはくり返し また日本外交の在り方については、七七年の日 そこで、日本はあわてることなく、 盲目的中国賛美や追従の動きがみら 九年四月まで 中ツ友好 同文 同

じる外交の展開を提唱している。 外交戦略を用いて、 ない現実を冷静に踏まえるべきだと説き、 を「一億火の玉」となって叫んでも、返ってはこ 対ソ外交の在り方については、 ソ連の経済的弱点にらまく乗 北 方領 土の返還 柔軟な

経てインドシナ戦争の終結、 恩来のリーダーシップの拡大、革命外交から国 悠じさせるものがある。 換して行った過程の解明も著者ならではの鋭さを 以降グアム・ドクトリン、 的展望を試みている。 外交への転換、 中国の巨大な変ぼうについては、 鄧 沒活、 華国鋒体制の成立まで透徹した歴史 天安門事件、 また、 新 米国がニクソン時代 鄧批判、 米中接近に大きく転 太平洋ドクトリンを 佐藤紀久夫) 林彪事件、 四 人組 追 周

石町 東洋経済新報社発行=東京都中央区日本橋本 一の四 1、1100円